

■殿様日記 vol.9 金峯神社大祭 流鏝馬神事に参列して

平成28年 穂張り月

長岡市内の蔵王にある金峯神社から、7月15日に行われる大祭のご案内を頂いた。昨今は毎年参加しており、今年も出掛けて行った。

午後2時、社殿において神事が始まった。桃生禰宜様^{ねぎ}を中心に5人の神職様によって祝詞が奏上される。伎楽の流れる中、社殿内には氏子の皆様が座し神職様の奉仕を見守っている。私の席からは神前の奥の本殿がよく見え、神職様がたの手渡しでお供え物が神様に供えられていく様子がよく分かる。それぞれ

三宝に載せられた一つひとつの海の物、畑の物などが手際よく、しかし厳かに次々と奥殿に運ばれていく。その後、禰宜様たちが元の席に戻り、祝詞が唱えられる。

その後、紅一点の神職様による舞楽が始まった。朝日舞と言う舞で別名宮司舞とも言い、宮内庁の雅楽の方が振付をされた、男女ともに舞うことのできる舞だそうである。

女性の神職の正装は男性の神職の装束とは異なり、写真のように頭には菊の花と葉がついた冠を付ける。手には鏡輪を取り付けた榊の枝を持って舞う。御神楽とは異なっており、私は他の神社では見たことがない舞であった。

神事は1時間ぐらいで終わり、次に稚児舞が始まった。装束を付けた6人の小学生の女の子が2人1組になって、手には扇と鈴を持って舞う。雅楽は女子が笛、男子が太鼓をそれぞれ担当している。

いよいよ5時から流鏝馬の神事が始まる。

金峯神社の流鏝馬の歴史は、その昔千年前にさかのぼり、源義家が東北征伐の時に金峯神社で戦勝祈願の流鏝馬を奉納したのが始まりだということである。



紅一点の神職の舞 (撮影：外山由夫)



稚児舞 (撮影：外山由夫)



社殿前 馬上の桃生禰宜 (撮影：牧野忠昌)



社殿前 矢を射る 赤い母衣
(撮影：牧野忠昌)



赤い母衣 参道を疾走 (撮影：外山由夫)

新潟県では佐渡と金峯神社の2カ所にしか残っていないと伺った。

狩装束を付けた射手の2人は神殿でお祓いを受け、桃生禰宜様は馬に乗ったまま社殿のまわりを3回廻られ、少しずつ厳かに流鏝馬執行への機運が高まってくる。

射手の2人はそれぞれ衣装の背中側に赤い母衣と黄色い母衣を付けている。射手はまず社殿の前で馬を停めて馬上からの的をめがけて矢を射る。的は袴を付けた男性が掲げている竿の先に取り付けられている。射終わると約200メートル先の赤い鳥居まで参道を疾走する。後ろにたなびく赤い母衣、黄色の母衣が鮮やかに流鏝馬は続く。

今年は天候に恵まれ、無事流鏝馬の神事は終了した。1千年続くこの神事は神社にとっても、また、氏子の皆様にとってもその伝統文化の継承は並大抵のことではないと思う。日頃から皆様方の金峯神社を支える奉仕の精神がなければ、到底継続できるものではないと感じた。



黄色い母衣 参道を疾走 (撮影：牧野忠昌)